



# 妙の光

通刊71号 復刊50号

2005年6月26日(季刊)

角田山妙光寺 発行

新潟県西蒲原郡卷町

角田浜 〒953-0011

TEL 0256-77-2025

# カルガモ

一般にカモは秋に北から来て冬を過ごし、春戻つていつ渡り鳥だが、カルガモだけは一年中日本各地にいる。皇居のお堀を目指して親子連れで道路を横断する、その愛らしい姿ですっかり有名になった。

毎年六月になると境内の池にもつがいが現れる。この時季に一夫一婦になつて水辺の草むらで十個余りの卵を孵化させるそうなのだが、残念ながら境内でその姿はまだ見たことがない。雉の親子連れは時々現れるが。

外敵となる人間や、狸などの獣の気配がするせいかもしれない。子連れで池を泳ぐ姿を見てみたいが、何が不満か教えてくれるなら聞いてみたい。

夏鴨や大竹藪に迷ひ込む

松本 弘孝

夏鴨や大竹藪に迷ひ込む

坂本 信子

# 住職三十年、心に残る言葉の数々

小川英爾

今は少し離れた町の寺に移られたが数年前まで近い寺の住職で、私が二十二歳で妙光寺に入つて右も左も分からぬとき、支えてくれた先輩がいる。この方と久しぶりにゆっくり飲む機会があり、あらめて住職就任丸三十年が過ぎたことを思い出して昔話に花が咲いた。先輩住職はこの日人間ドックだったのだが、日ごろの飲みすぎで悪い検査結果の出るのが心配になり、前々日にわざわざ別の医院で同じ検査を受けて安心してからドックに臨んだという、大柄な見かけによらない気が小さくて優しい性格の方なのだ。こうした人たちのおかげでやつてこれた三十年間を、心に残る数々の言葉で思い起こしてみたい。

## 信頼

「あんたがうちの大事な御前様にあんまり酒を飲ませるから盲腸になつたんだ」。結婚する前この先輩住職によく飲みつれて行つてもらい帰れずに泊めもらつた。分からぬことを教えてもらい、愚痴を聞いてもらつていたのだが、そこで深夜絶えられない腹痛を感じ

じ、近所の救急病院で盲腸炎だから入院して明日手術となつた。寺を留守にできない母の代わりに着替えを持つてきた檀家でいつもお世話になつていて婆ちゃんの言葉。この婆ちゃんの連れ合いは酒嫌いの生真面目な人で、酒と盲腸は関係ないのに本気で私の身体を気遣う気持ちが伝わつて、先輩も大きな体を小さくしていた。

「弟の英爾がお父さんの跡を継いで妙光寺の住職になつたから、お兄さんもお姉さんもこうして生まれ育つた所に帰つてくることができるんでしょ。もつと優しくしたらどうです」。私は次男の末っ子で、兄姉たちからは我が儘な弟といつも見られていた。住職になつても帰省した兄姉にいつも小言を言われていて、たまたま法事の手伝いに来ていた先輩住職が言い返せない私に代わつて反論した言葉。

「小川君、カメラ持つて来たかい?」。客殿の建替え工事で寄付金のお願いに檀家回りをし、当時はどうしても酒を勧められるから無理がたたつて血を吐いた。心配した仙台の兄が親友の医者に相談し、そこへ検査

を受けに行つて先生に言われた。「検査はするけど多分心労による一過性のものだよ。ここには伊豆沼という渡り鳥の多さで全国的に知られた湖があるんだ。確かに写真が趣味だつたよね、みんな忘れて少しのんびりしていきな」。肩から力がスーと抜けた気がした。

「いやー、今日は海で魚がたくさん採れたからお寺にも分けようと思つて持つてきましたけど誰もいないじゃないか。台所に置いてくつもりで勝手に上がつて、どうせすぐに戻ると思つたからついでに一杯ご馳走になつてたよ。でもこの酒なんか変だぞ」。近頃は物騒で鍵をかけずに留守にできないが、以前はこんなふうに誰でも入れた。檀家で漁師のおじさんもその調子で、食卓の漬物をつまんで飲んでた酒は好きな日本酒でなく焼酎だつたのだ。「そうかどうりで辛いばかりで旨みがねえわけだ」と。

「御前様、あんたがいつまでも飲んでるから手伝いのおなご衆がお斎を食べらんねえよ」。近ごろ法事のお斎は料理屋さんになつたが、以前はお經もお斎も自宅だつた。田舎のことで酒飲んべえの多い親戚に混じつて勧められるまま調子に乗つて上座で飲んでいたとき、この婆ちゃんに叱られた。この席が片付いてからお手伝いの女性たちのお斎にするのが慣わしで、いくら座が盛り上がりてもお手伝いの人への配慮を忘れてはいけないと教えられた。

「心配すんなて。私が段取りもつけるし、できるだけ手伝うから」。毎年四月の「ご判様」という大祭は一泊二日で五回の食事を、毎回百人分以上全て手作りしていた。長年母と檀家のベテランの婆ちゃん二人で采配してきたが、私の結婚を期に高齢のふたりがやる気を失くして二十台で経験の無い妻にその重責が一気にかかるってきた。思い余つてある夜、私と妻は時々手伝つてくれていた近所の世話人の奥さんを訪ね相談を持ちかけたのだった。大祭でこの夫婦は境内に参拝客相手の茶店を開いていて、奥さんも店を離れられないくらい忙しいのをこちらが忘れていたほど私も追い詰められていた。そんなときの優しく心強い言葉は嬉しかった。結婚といえば三十過ぎて独身だつた私は、その当時境内の掃除等を手伝つてくれていた亡き父の姉がいた。いつも寡黙で毅然としていた七十過ぎの叔母さんにある日「なぜお嫁さん貰わないのか」と厳しく問い合わせられた。私は「寺の仕事が手一杯での身では結婚しても相手への責任が取れないから、目鼻がつくまでと考へている」と答えた。それに対し「よくわかりました。御前様がそこまできちんとお考えなら私はもう申し上げません。できるだけお手伝いしますから、頑張つてください」。その静かな口調が胸に響いた。

## 護持

「この寺の廊下を歩くと半日で白足袋の裏が黒くな

るね」。建替え前の客殿は築二百年余の茅葺だつたから、行事の前どんなに丁寧に掃除してもひと風吹くと屋根裏のススが落ち、戸の隙間からはほこりが入る。手伝いに来た他の住職の何気ないひと言とはいえ、辛かつた。

「だいたいこんな低地にお寺が建つてることが問題なんだ。排水で困るなら境内に土を入れて高くすればいいじゃないか」。建てた当初は高台で海が見えたと伝わっている妙光寺だが、二百年余りの間に砂防林や道路整備で周囲が高くなつてしまつた。そのため先代住職のころから四、五年に一度は床上浸水するほど裏山からの出水に悩まされてきた。行政に陳情しても「お寺一軒の被害くらいでは」との言葉の次に出てきた役人の言葉。

それが「ひとり言だから気にするなよ。妙光寺さんが長年水害に困つてきているのに、今度の町の計画ではさらに境内の排水が悪くなるぞ。正式に決まる前に早く変更させないとまずいよなあ」。たまたま町役場から上がってきた書類を担当した県庁の職員が、いつも妙光寺の排水を心配する世話人のお店で漏らしてくれた。この件を突破口に行政と折衝し、本格的な海までの排水路工事が決まつた。

ところが水路の用地提供に同意しない人がでてきた。一向に進展しない話を案じた檀家総代の婆ちゃんが

「隣がうちの土地だから、先方と土地を交換してそこを水路に提供したらどうだろう」とユニークな案を出してくれた。そこまで周囲が熱心になつたことと、町職員や区長の一所懸命な説得が講じて同意を得るにいたり、懸案の排水問題は解決することができた。

「本堂建替え工事の寄付金持つて來たよ。約束した金額の倍にしたからね。でも分家のうちが本家より多く出したのを知られるとまずいから内緒だよ。せつかくやるんだからいい本堂を建ててね」。こんなありがたい話が何軒かあり、そのこともあって回廊に掲示した寄付者芳名額は寄付金額を書かないことに決めた。

「御前様が言うとおり、これから時代子供が減つたり家の跡を継がなかつたりして檀家は減る一方だよ。寺を護つて行くには新しいこともやらんばねえぞ。それにこの墓は世の中の人助けだよ。やるんならきちんと責任の取れることしんばねえ。世話人皆が保証人になつて銀行から金借りて真剣にやろう」。こうして安穩廟が世話人会議の席で決まり、十七年前に始まつた。

「新しい本堂の本堂の仏様を変える?。馴染んできた仏様だけど粗末にするわけがないし、安穩廟で新しく人たちも沢山増えたんだから、わかりやすいお釈迦様になるのはこれから若い人たちにもいいんじやないの。俺は賛成だな」。本堂工事の地区別檀家説明会で私と同年代の男性。

## 信 心

「御前様、無理するなね。オラが死んだときにはあんたに葬式出してもらつて、あの世の仏様の所へ送つてもらうんだから元気でいてもらわんばねえんだよ」。私が風邪を引いて受診した病院の待合室で会つた檀家の婆ちゃん。

「仏様にお供えしようと思つて今日の持齋（じさい）

のために炊いた、うちで一番いい田んぼのコシヒカリだ。いくら酒いっぱい飲んだからつてこのご飯は食べていつてもらわんばねえ」。すつかり廃れてしまつたが、以前は持齋といつて年回忌が当たらない年のおもに秋、先祖のミニ法事をした農家が多かつた。わずかな親戚と私が自宅に招かれ、手作りの野菜料理と新米が美味しかつた。供養の原点を見た思いがする。

「あーあ、本山のお寺参りはいいことだが、オラが若いころは働くばかりでとてもそんな余裕なんかなかつた」。幼いころの小児麻痺で片足が不自由ながらも畠仕事を生涯こなした働き者の婆ちゃんがいる。たつての希望で身延山の団体参拝に参加し、皆の心配をよそに徒步で登る標高二千メートルの七面山にも挑戦した。狭い山道で下から掛け声も勇ましく登ってきた新興宗教の青年部の団体を、道の脇によけてやり過ごすとき曲がった腰を伸ばしながらの言葉には重みがあった。電話が鳴つた。「すみません、今朝早くお邪魔した者

です。ありがとうございました。仏様にお参りしてご住職の話を聞いて気持ちがはれました。もういつでも頑張つてみることにします」。ある日の早朝、見知らぬ男が訪ねてきて、県外から婿に来たがうまくいかず実家にも戻れないでの死のうと思つてきた。その前に誰かに聞いて欲しいと言うので、お茶を勧めて付き合つたのだつた。

来訪者もさまざまだ。憔悴しきつた中年の夫婦が玄関に立つていたので、上がつてもらいお茶を勧めた。「以前九州旅行をしたときキリスト教の教会はどこも扉が開いて自由に入ることができたのに、お寺はどこも閉まっています。こちらのお寺の玄関が大きく開いていたので、つい引き込まれるように入つてしまいまし」と婦人が。聞けば娘さんが私生児を堕ろしたショックだと、いうので、後日娘さんも同行して供養を営んだ。その際のご主人の「仏様の前ではどんな人も皆平等なんですね。私は仕事先で常に上下関係があつてそんなふうにしか人を見なくなつてしまつます。気持ちがすごく落ち着きました」の言葉も印象深いものだつた。差し出された名刺に一流企業の立派な肩書きが書いてあつた。

## 困 難

町内に産業廃棄物の処理場建設問題が起きたことがある。進め方も強引でその危険性を裏付けるかのよう

だつた。親しい友人と反対運動を計画しているときには身辺の危険も噂された。そのとき妻に「坊さんでしょ、命が惜しいなつて思つていないでしようね。後の家族のことは心配しなくていいからね」と見透かされた。その後かかつてきた電話で「誰が反対運動をやつてるかと思つたら角田の坊主だそうじやないか。寺のひとつやふたつ火をつけるのはわけないんだ。相手がそう言つてゐるから御前様やめてくれ」とある方からいわれ、表に立てなくなつた、恥ずかしい話。

はからずもある団体から、次回の町長選挙に立つてくれ組織を挙げて応援するから、と言われたことがある。その任ではないし、政治の世界に関心はなく妙光寺の状況も大変だったので丁重にお断りした。しかしどこからともなく噂が流れたらしく「御前様がそんな一党一派に関わるような選挙に出てもらつては困る。そんなことしたら寺への協力はできない」という電話をもらつた。今まで時効の笑い話。

噂と言えば「妙光寺の住職は外で立派な説教や講演したりしてゐるけど、家では若い奥さんと母親をいじめてるんだつて」と広まつてゐると聞いた。痴呆になつた母の外出先での話が元らしかつた。同じころ兄姉からも親戚からも「世話が不十分」と言われ、まさに四面楚歌。他人には正常に見えても同居している家族は大変なのに、幼い四人の娘は手がかかり、寺も忙し

かつた。今でこそこの病気の理解が進んでいるが、当時は同居して介護する家族が悪く言われることが多い、同じ悩みを持つ痴呆症患者を抱える家族の会にも出席した。このころほど家族とは一体何かを考えたことはない。大変なときはいろいろ物事を考えるときでもあるという、貴重な体験でもあつた。

## 別 れ

痴呆が進行した母は友人の尽力があつて老健施設にお世話になることができた。訪問しての帰り「いつ家に帰れる?」と問われた母の言葉が耳に残つて、寺に戻る道はいつも辛かつた。老衰が進んでからは成長した娘たちも協力するようになつて、在宅での介護の日が増えた。往診をお願いしている先生から長くないと伝えられたころのある日、法事で上京した宿にかかる深夜の妻からの電話で死を知らされた。いつも通りに夕食を妻に食べさせてもらい、「ありがとう」と言つた。それまでほとんど言葉がなかつたので不思議に思つた。しばらく見守つていたら静かに息を引き取つたといふ。最後の言葉にこれまでのわだかまりがふつきれたとも言つてくれた。

「御前様、婆さんをとうとう生涯飛行機に乗せてやることができなかつたから、遺骨になつたけど新潟までよろしく頼みます。最後だから駅までは私が抱いていってやろう」。函館に住むこの老夫婦に子供はなく、

安穩廟を申し込みに電車を乗り継いでやつてきたのがもう十年以上前のこと。その後の二度とも電車だった。

若いころ飛行機製造の仕事に就いていたご主人なのに「あんな物が飛ぶことが変だ」と大の飛行機嫌い。私の娘たちを孫のように思つてか、たびたびお菓子が送られてきた。その奥さんが亡くなつて遺骨を妙光寺に届ける体力がないとのことで、私が引き取りに行き、お世話をしている近所の方やヘルパーさん共々函館駅に見送つてこられたときの言葉。いたわり合つて過ごしてきた夫婦の関係が胸に沁みた。

### 不思議

「昔からこの『ご判様』に雨は降つたことが無いんだ。心配しないでいいから支度して本堂に行け。必ず晴れるから」。確かに毎年四月のこの行事はどんなに雨が降つても、お練の行列が出るころには晴れると言われている。しかし住職になりたてのある年、激しい雨降りで僧侶の袈裟や衣、それに稚児の高価な衣装を濡らすわけにいかない。おろおろする私に自信を持つて言つた老僧の言葉。その通りに雨は嘘のように上がり、日が差したなかで行列ができた。この三十年間雨でお練の行列ができなかつたことは一度もない。

「イヤー、なんて不思議な寺ですか。ここにはオーラと言うか、特別なエネルギーが溢れていますねえ。この二年あまり全国の宗教施設を沢山取材してきました

ど、これほどのお寺は珍しいですよ」。東京から取材に来た共同通信の新聞記者の最初の言葉だつた。今は編集委員の肩書きを持つ著書も多い人の言葉だけに、こちらの方が驚かされた。もちろん後日『神々の変容』という連載の中で紹介され、新潟日報はじめ全国の地方新聞で掲載された。古い寺はその土地の持つ気を見て建てられることが多いと何かで読んだことがあるが、妙光寺もそのひとつなのかもしれない。だからといって何でも叶うというものでなく、さらにそこに人の力が加わり続けることが大切なんだと誰かが教えてくれた。

まだまだ他にも書ききれないありがたい言葉がいっぱいある。七百年という歴史の中のたかだか三十年でしかないが、本当に沢山の言葉と力をいただいてこの寺に育ててもらつた。何よりも素朴な信仰心というか、本当に正直な気持ちのふれあいが大切なんだとつくづく思う。これからもこうした人たちの気持ちが行き交う心のこもつた寺でありたいと思う。しかいまこれまでの伝統が廃れ、人間関係が薄く、何が大切なのかが見えにくくい変化の激しい時代になつた。こうしたときだからこそ指針を示し、悩みを受け留め、そして人を育てることのできる寺でありたいと願つてゐる。

# 子を失つた悲しみのなかで

新潟市明田 白井 悅子さん（六十四才）



で挙式した。二人の孫が小五と年中で現在六人家族。最近お嫁さんもパートに出るようになり、明るくてよく動くその姿に白井さんは目を細めて喜んでいる。

（8）

ひらく寺の活け花の会にも聞きつけて参加している。大柄な体で活動的、テキパキ振舞う姿は爽やかだ。

白井家はご主人が四代目で、浄土真宗の家の分家だった初代が、医者に見離された病気を妙光寺の題目堂で修行して治した。これを機に堂守りとなり、二代目から妙光寺の檀家になつた。またご主人の叔父さんにある三世代目の弟も出家して、苦学の末に千葉のお寺の住職を勤めた。さらにその妹で義理の叔母にあつた人が近所に住み、白井さんの熱心なお参りはこの二人の勧めがきっかけだった。

もともと信仰深い白井さんだったがこれらのことから熱心になり、もつとお経が読めるようになりたいと、先ごろの第一回参籠修行に参加した。心がつらくなると車を走らせてお寺に向かう機会がさらに増えた。義理の叔母の勧めもあり、この秋の身延山参拝旅行にも夫婦で参加することにした。

普段の白井さんは建設業を営むご主人を支えながら、畑で野菜を作り庭に咲き誇る花々を育てている。挿し木で増やした庭の沢山のアジサイを、この春寺の入り口に移植させてもらった。趣味の踊りで名取になつたが、膝を痛めてから近所のお年寄りに教える程度にしている。さらに週一回だが内輪で

十年前に白井さん夫婦の長男が結婚する際、偶然にも妙子さんと言うお嫁さんの名前が、熱心な日蓮宗信者の曾祖母の戒名に由来すると聞き、妙光寺

## 第二回参籠修行も熱心に

### 第二回参籠修行

第二回目の一泊二日参籠修行が五人とやや寂しい人数でしたが、和やかにじっくりと行われました。ゴーレデン・ウイーク明けの境内が緑と花々で埋まつた季節、ウグイスの声を聞きながらの最高の修行環境でした。前回の反省を踏まえても内容も一部変更し、夜の本堂での唱題修行、清潔しい早朝の岩屋参拝、和室での講義も好評でした。

感想の一部です。

—良かつた点—　・和やかなうちに始めから終わりまで終始したことを感謝します。・すべて満点。・仏教の由来、その他詳細のお話しが良かつた。食事がおいしかった。・雰囲気、お食事、メンバー、皆良かつた。お話しもわり易く筋が通っていて楽しかった。案

内も親切で

よかつたで

す。岩屋へ

歩いたり、

動きがある

のもよかつ

た。寝具も

安心でし

た。それでもお稚児さんが予定の十人を超す十三人。年番でお手伝いの巻・割前地区の人たちが予定以上に集まり「こんなに楽しいお手伝いなら毎年でいい」なんて声が出るほど、笑い声が一杯の夕方まで賑やかな反省慰労会でした。

## ペットのお墓が完成

前々から希望のあつたペットのお墓が完成し、受付開始しました。位置は題目堂と安穩廟の中間で、火葬したペットの遺骨を合祀する形です。檀徒と安穩会員だけが対象で、それ以外の一般の方は受け付けましません。詳細は直接ご相談ください。



完成したペット用のお墓

## 墓地の名義が妙光寺に

山側の従来の墓地は昔から妙光寺の檀徒だけで使用してきましたが、この土地の登記上の実質名義は巻町になつていました。十月に新潟市と合併になりますがそうなると今度は名義が新潟市になつてしまふため、巻町からの申し出で売買によって妙光寺の名義に登記しました。

## 役員会議開催

六月十九日、総代世話人による妙光寺役員会議を開催しました。昨年度の会計報告と今年度の事業計画、予算を審議しました。主にはここにお知らせしている内容と、また次号でお知らせすることです。妙光寺の役員は現在二十三名で、各地区から選出してもらっています。三年任期で再任可能ですが満七十五歳の定年制です。

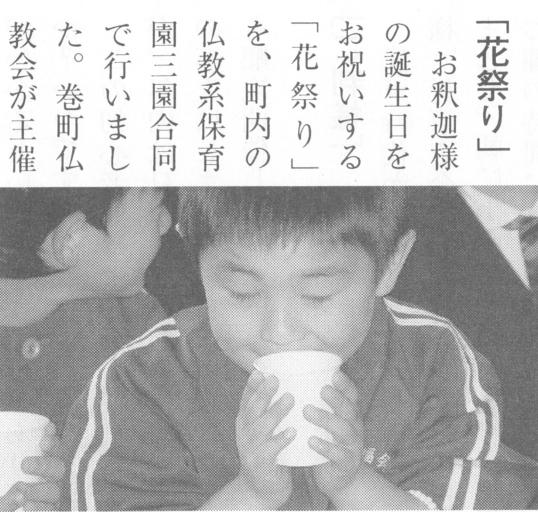
## 登録文化財に申請

修復工事の完成した三重塔を文化財にする準備を進めてきましたが、専門

家の勧めで山門と鐘楼（鐘撞き堂）も

一緒に、このたび国の「有形登録文化財」として文化庁に申請しました。これは国宝とか指定文化財とは少し違つて、簡単に言えば準文化財のようなものですから管理もさほど厳しくありません。それでも国が認めるもので、多分秋にはブロンズ製の立派な認定証が届くと思います。ゆくゆくは築二五〇年の客殿を中心に、妙光寺全体の歴史的空間として考えて行きましょうとは文化財関係者の話です。

## 「花祭り」



花祭りでは「誕生佛」に甘茶をかけてから、それをいただきます。

## 「花祭り」

お釈迦様の誕生日をお祝いする「花祭り」を、町内の仏教系保育園三園合同で行いました。巻町仏教会が主催

しているのですが、妙光寺が会場としてふさわしいとここ数年継続しています。甘茶かけ、紙芝居、院庭での踊りと子供たちの元気な声が響きました。

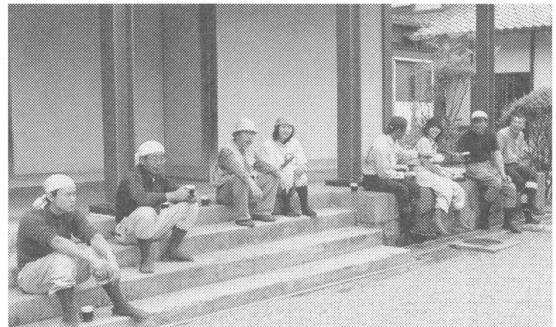
## 茶庭工事

安穏会員で東京国分寺市の田代さん夫妻の遺品として、茶道具と茶庭のつくばい、庭石、庭木が運搬と中庭への工事費用込みで奉納されました。作業には田代邸に出入りの庭師の他に、田代さんの弟にあたり妙光寺の造園設計をずっと担つてこられた野澤先生のお弟子さんたちがボランティアで当たりました。



持ってきた「つくばい」を中庭に据え付ける作業

町の本多保司さんかも新品茶道具一式の奉納もあり、今後の活用を思案中です。



ついでに境内の松の剪定までして、お茶の時間



# ご案内

## 一年会費と住所変更

個々に郵送または世話人が直接ご案内しますが、今年度の年会費をお願いします。合併による住所変更にはまだ対応できていません。郵送の方で住所の名称が変更になつた方は、振り替え用紙で新住所をお知らせください。世話人のいる地区は後日一括して変更します。その他不明な点、疑問等は遠慮なくお問い合わせください。

## お盆参りと施餓鬼塔婆のご案内

妙光寺では八月一日がお盆のお墓参りです。朝六時からお墓でのお経を受け付けています。安穩廟も同様です。

十一時からは本堂で施餓鬼法要と、新盆の精霊の供養を行います。ご案内の施餓鬼塔婆とは、お釈迦様の徳を偲んで建てた塔（卒塔婆・そとうば）にちなんで、先祖や故人の供養のために六尺（一八〇センチ）の板に、戒名や先祖代々と書いて立てて法要中に読み上げするものです。

特に新盆のお宅は本堂に位牌に戒名を記して供養します

ので、塔婆供養、参拝をお勧めします。

## 身延山団体参拝のご案内

日蓮宗総本山身延山久遠寺と七面山への団体参拝旅行を募集中です。妙光寺で大型バス一台を貸切り、十月二日(日)～四日(火)の二泊三日で行きます。七面山に登る方三万七千円、登らず温泉宿泊四万八千円。まだ定員まで余裕がありますので、お誘いあわせお申し込みください。口頭では伝

えたが申込金五千円がまだと言う方、早めにお願いします。詳細は参加者に直接ご案内します。

## 戒名を授ける授戒会と参籠研修の日程

戒名は仏様の弟子となつた証としてつけるもので、生前につけるのが本来です。戒名をいただいて自分のその後の行き方をしつかり戒めるから戒名といいます。

菩提寺の住職が仏様に代わってお授けするものですから、その寺の檀信徒にしかおつけしません。代々続かなくとも、ご夫婦のひとりだけでも個人につけるのですから問題ありません。これまでの三回で五十名以上が受けられました。費用は三万円で、戒名を刺繡した略式袈裟と数珠を記念に差し上げます。

次号で再度お知らせしますが、ご希望の方、詳細を知りたい方、安穩会員を含めて遠慮なくお問い合わせください。お授けする授戒会は十月十五日（土）です。

「一泊二日初めての参籠修行（さんろうしゅぎょう）」の第三回目は秋に日程が取れないので、来年春に開催します。

## ボランティア募集

お寺でのボランティアでボランティア。板塀と冠木門（かぶきもん）の塗装の時期なのですが、人手不足で延び延びになっています。防腐塗料を刷け塗りするのですが、誰でもできます。高所でないので危険もありません。ただ面積があるところを2～3度塗りするので、手間がかかります。それぞれのご都合つく雨の降らない日を選んで少しづつ手分けして作業を進めます。お願いできる方はお電話ください。



## フェステイバルが変わります

「大きな手術をすることになつて不安です。こんなことなら後のことをもつと早くご相談しておけばよかつた」。この電話をいただいた半年後、元気なお姿を見せて「あの時電話して本当に良かった。それだけで安心できた」と言われたBさん。最近こんなお話を続

くので、夏のフェステイバルでズバリ葬儀の形を取り上げます。

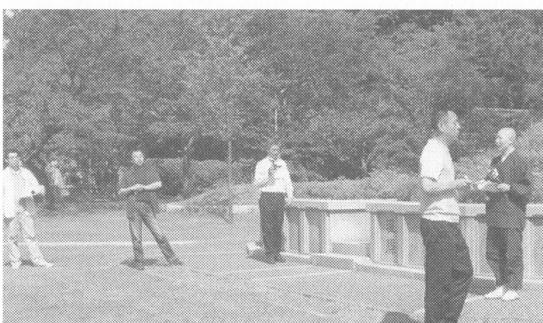
人の死は葬儀の場だけでなく、遺された人にとっての精神的な辛さや法律上の処理が山のようになり、そのため事前の準備が大切なことはいまや常識です。こうしたその人の一連の最期を象徴する、その場限りではないものが葬儀ともいえます。一方でその場の細かなことも数限りなくあって、わからぬことだらけというのも現実で

す。そこで具体的に模擬の葬儀を本堂で行い、その意味合いから費用、前後のことまでを語り合おうというものです。「私が遺体役になります」という、会員からのお申し出をいただき準備も着々です。

重苦しい雰囲気にならないよう、また日程が混みすぎるという声を受け、開始时刻を早めて全体にゆとりと安らぎを工夫しました。院庭に喫茶コーナーを開店してコーヒー、ケーキ、昼食のカレーもご用意します。テントも改良して全面に日除けを張り、もし雨天でも隙間に雨どいをつけて雨漏りをなくしました。休憩時間も開演中もゆったりとすごしていただけます。早目の到着でゆつたりできるよう送迎バスの本数も増やしました。

法要後、修復してライトアップもした三重塔と周囲の池で、新たに小さな口ウソクの火による燈籠供養を行います。

供養の会場を安穏廟から境



6月14日、関係者が集まり安穏廟で法要のリハーサルを行ないました

さらに、埋葬された方への供養の法要は、声明（しょうみょう）といつて音符に基づいた音楽としてお経を中心いて唱えます。若い尼僧さんの澄みきつた声が、あの緑と空に響きます。いつもの華やかな花びらの散華を、今年は皆さん全員に参加していただく予定です。その場で灯す大口ウソクの献灯にご協力お願いします。おかげさまで毎年その数が増え、今年は三百本を予定しています。

内に移し、水面に映る小さな炎と篠笛の音色に故人を偲び、私たちの心の安らぎと社会の平安を祈りましょう。『鼓童』の小島千絵子さんの幻想的な踊りも加わります。ミニ燈籠は交流パーティー参加費に含まれますが、パーティーに参加されない方には会場でお分けします。

最後は交流パーティーでしめますが、ぜひこちらにもご参加ください。

古くから地元角田浜に伝わりながら廃れかけていた盆踊り「角田甚句」を数年前に「安穩甚句」として復活させ、住職以下地元の若い人たちが笛と太鼓で楽しく演奏します。ただこちらも「賑やかなのはちょっとつらい」と言う方もあり、会場を広げて静かな場所も用意しました。さらに新しくもう一曲、こんどはゆっくりした曲に踊りをつけて『鼓童』の皆さんをご紹介します。

『鼓童』は太鼓が中心のグループですが、今回は笛や胡弓などの楽器に踊りを加えた少人数編成です。華やかななかにも哀調ある調べで、忘れかけた懐

かしさをかもしだす、とても贅沢な雰囲気になるでしょう。毎年大勢の参加がありますが、会場を広げたのでもつと大丈夫です。どなたでも気軽にお申し込みください。お待ちしています。。

七月の関東地区のお盆で住職が上京し、上野近くの入谷を拠点にします。関東方面の方、ご相談等ありましたらなんでも遠慮なくご連絡ください。お会いする時間も平日なら取れます。

年会費の振込用紙を同封しました。郵便局からの送金か、妙光寺に直接でも結構です。その際住所変更、近況等お知らせください。フェスティバル安穏の申し込み、大口ウソク献灯もこちらでお願いします。またご希望の方は八月一日お盆参りの施餓鬼塔婆もお申し込みください。



# 「きつかけ」

## 小川なぎさ



3人の子どもたちが家を離れ、残る長女にも全く手がかからない生活にもなれました。ところが長年の時間に追

われる生活習慣はなかなか変えられず、相変わらずお日様とともに目覚める毎日です。手始めに朝のこの一時間ほどの時間を唯一誰にも邪魔をされない、一人静かに好きなことをする時間にしようと思いました。

でもお茶を飲みながら今日一日の予定を考えている

うちにあれもこれもとやることがでてきて、結局は以前より働いてしまう毎日を送っていました。

なんだか時間の使い方がうまくいかずとても疲れてしまつて、寂しさもあつてか、もんもんと暮らしていたある日、友人が洗顔セットをプレゼントし

てくれました。彼女は隣の浄土真宗のお寺の奥さんで、お寺生まれの婿取り跡継ぎ。私と同じ年頃の四人の息子を

持ち、自身も僧侶としてさまざまな活動をしながらお寺を守っています。幼い子どもをかかえて、慣れない土地で一人寂しく子育てをしていた私のはじめての地元の友人です。

私が時間に追われて髪はぼさぼさ、お化粧どころか顔も洗わない生活を見てきた彼女。気持ちがうれしくて、さっそく朝は顔を洗うこと一番の課題としてはじめました。相変わらず忘れたりお昼近くになつたりする日もありますが、このことがきっかけでなんとか元気が出てきました。

読書、手芸、犬の散歩などその日の気分で少しづつほつとできる時間の使い方が分かつてきただので楽しいし、仕事に対する気持ちも前向きになりつつあるので大丈夫だと思います。

気持ちが弱つている時には、励ましを洗うこと！夜も同じだけ」「これからは自分自身に磨きをかけて明るい気持ちで行こう」と。おまけに「気にしなくていいよ。百円ショッピングのものだからさ、でも私も使っているけどこれでほんと十分なんだよ」心使いがにじり、おもしろい話をきいたり。こうして私の軽い「空の巣症候群」は終息に向かっています。

# 行事案内

## 年会費納入お願い

年会費と施餓鬼塔婆供養のご案内を近隣は世話人が直接、遠方の方と安穩会員は郵送でします。郵送の方は八月一日のお参りにご持参でも結構ですが、同封の振り替え用紙を忘れずにお持ちください。塔婆供養の申し込み書は当日混雑しますので事前にお送りください。

## 七月初旬 関東地区お盆經

関東地区の檀信徒宅に、住職が日時お知らせのうえでお伺いします。

## 八月一日(月) お盆墓参り、施餓鬼法要

朝六時～十時まで墓地にて墓のお経を受け付けます。十時半～安穩廟法要、十一時～本堂にて施餓鬼法要、十二時～お斎、一時～説教。

## 八月十三日～十六日 お盆棚経

例年通りに住職と鎌田、お手伝いの成川上人が手分けして全檀信徒宅に伺います。予定を知りたい方、留守になるお宅は八月十日以降に電話ください。新潟市内と県内遠方の方は十日前に、日時を連絡の上で伺います。

## 八月十九日(金) 岩屋七面宮祭礼

午前十時半～本堂にて法要、お加持。その後岩屋に移動して法要。お昼に赤飯供養があります。

## 八月二十七日(土) 第十五回フェスティバル安穩

参加自由。詳細は案内パンフレットをご覧ください。

## 九月一～十三日(祭日)

午前十時半～安穩廟法要。十一時～秋期彼岸会中日法要。昼～お斎。一時～住職説教。



あ  
・  
と  
・  
が  
・  
き



父である先代住職亡き後、大学を出ですぐ妙光寺の住職になつてこの春で丸三十年でした。先代の敷いたレールを来ただけのつもりですが、気がつけば妙光寺がすっかり変わつてしましました。皆様のお力があればこそと感謝でいっぱいです。

以前妙光寺に現代日本の仏教を調査研究に来たアメリカ人のお世話で、十一月あちらの大学で講演をしないかとお誘いをいただきました。プリンストン大学とエール大学といえば有名校で、見聞を広めるつもりでお受けしました。妙光寺でやつてきたこととこれからを通して現代日本の現場の仏教を語るのがテーマです。

三十年勤続のご褒美として妙光寺の出張扱いを役員会議で承認いただきました。二週間となると妻と二人で留守にはできないので、次女を通訳に同行させてもらいます。